

支那国衰えたりといえども、なおかくの如き人物あり。想うに汝等、支那に遊ぶの日も遠からず。到らば必ずその党与の人物を物色して、これと締交せよ。彼等がただに支那における最進歩の党与たるのみならず、恐らくはアジアにおける最進歩の党与ならん¹⁰¹

さて、民蔵が孫文と出会った時期については未だ明らかとなっていないが、1905 年 11 月に発行された中国同盟会の機関誌『民報』第 2 号に土地復権同志会の主意書が掲載されていることから、少なくともこの頃には二人の間に交流があったと推測される。革命派と民蔵との交流については 1901 年頃までさかのぼれるようであり、宮崎家に遺されている史料のなかに若き日の吳弱男の写像があるが、写像からして彼女が青山女学院に留学してきた初期のものと推察される。また辛亥革命成功直後、民蔵は中国に渡っているが、その際の記念写像も残されており、民蔵が積極的に中国革命に関わっていたことを窺わせる。

さらに民蔵は、革命政府のもとで進められた憲法制定会議に「土地均享」を実現するよう求めた請願書も提出しており、これらは孫文ら革命政府にどれほど期待していたか、民蔵の革命派に対する思いの強さを示す資料であろう。こうした民蔵と孫文との交流は、滔天の死後も続き、民蔵は孫文の臨終の間際に面会を許された日本人四人のうちの一人にもなった。



宮崎彌蔵【所蔵：荒尾市】

では、もう一人の兄・彌蔵について見ていこう。彌蔵もまた、父・長蔵や兄・八郎、民蔵の影響を受け、幼い頃から名誉や金銭に執着せず、義侠を重んじ、一方でヨーロッパの国々の脅威にさらされるアジアの現状を憂う人物であった。兄弟や仲間と研究・思考・議論を重ね、彼がたどり着いた答えは「あらゆる人びとが生きていける世界を築くためには腕力による方法」、つまり「革命が必要不可欠であり、この拠点となりうるのは中国である。中国で革命が成功すれば、印度、タイ、ベトナム、フィリピン、エジプトといった西欧列強に蹂躪されている国々を救い、人権を回復することができる」とする「革命的アジア主義」であった。

この考えに深く共鳴したのが、弟・滔天であり、以後二人はともに中国革命をめざして活動する。滔天における彌蔵の思想的影響は特に強く、滔天自身が評しているよ

うに、彌蔵こそは滔天に中国革命の意義を説き、彼の人生の「羅針盤」となった人物であった。西欧列強が世界各地で暴威を振るう当時にあって、彌蔵の「革命的アジア主義」は滔天の人生の大方針となり、やがて彌蔵が亡くなった後も、滔天は「世界革命」を目指し、その第一歩としての「中国革命」にその生涯を捧げた。

さて、彌蔵は中国語の勉強をするため、横浜の中国商館に住み込むのだが、この生活の中で当時横浜に潜伏していた孫文の同志・陳少白に出会っている。陳少白と出会ったときの彌蔵の喜びようは、弟・滔天に宛てた手紙が約 3 メートルに及んだという事実からも窺

えよう。このわずか数カ月後に彌蔵は病に倒れてしまうのだが、彼の志を引き継いだ滔天と陳少白が 1897 年に出会い、そして滔天と孫文が会って、この出会いはやがて孫文の中国革命の推進力となる。その後の歴史を知る現代の私たちから見れば、彌蔵と陳少白との出会いは歴史的にも評価されるべきものであり、孫文自身、自伝「志有ればついに成る」の中で、「少白は独り日本に留って東邦の国情を考察することとし、…（中略）…宮崎寅蔵の兄宮崎彌蔵を知るに至った。これ革命党と日本人と相知るに至った始めである¹⁰²」と評価している。彌蔵と孫文が直接会うことはなかったが、彌蔵が孫文の革命運動に与えた影響は大きかったと評価できるだろう。

4) 「東亜の珍宝」孫文と滔天邂逅



宮崎滔天（寅蔵）【所蔵：荒尾市】

兄たちの影響を受けて、中国革命をめざすようになった滔天と孫文がやがて出会い、二人は国を超えて深く交流していくことになるわけだが、二人が出会う前の滔天自身のこと、彼の著作『三十三年之夢』を参考にしながら紹介しておきたい。

立派な志を持って散った「兄・八郎のようになりなさい」と幼い頃から言い育てられた滔天は、「大将豪傑」とはどういった人なのか、また、八郎が唱えた「自由民権」がどのような思想なのかよく分からぬままに、八郎のような「大将豪傑」たる人物になりたいと思い、「自由民権」こそはすぐれた思想だと信じてすくすくと育った。その結果、小学生の頃から習字や作文の課題でとにかく「自由民権」と書く子どもに成長し、度々教師たちから叱られたそうである。だが、叱られたくらいで治るものではなく、滔天は自らを「先天的自由民権家」だと思っていたし、それをあるべき姿、

当然のことだと考えていた。

ちなみに、宮崎滔天が「滔天」と名乗るようになった所以であるが、これは 1897 年、滔天が孫文を故郷の荒尾に案内したあと、孫文と陳少白を長崎に連れていったときのことである。肥前の出身で鉱山業を生業とし金玉均や孫文の活動を支援した渡辺元^{わたなべ 元}（1855-1918）が案内をしてくれた長崎のある寺でのこと、高僧の誉れ高い禅師に教えられた維摩経の一節の中の「白浪滔天（白い波が天まで届く）」の文句が渡辺の気に入りと、それを滔天に贈ったという。以後、「白浪庵滔天」の号を名乗ることにしたという。「白浪」といえば、河竹木阿弥の世話物「白浪五人男」が想起されるが、主人公の「白浪」（盗賊¹⁰³）たちの天をも恐れぬ盗賊のイメージが、革命という大事を成し遂げようとする滔天にぴったりだったのだろうと評されている¹⁰⁴。

さて、滔天は兄・彌蔵が説く「支那革命主義」を「人生の大方針」と定め中国革命に進んでいくことになる 1891 年に至るまで、「自由民権」を求め放浪し続ける日々が続く。

熊本県立熊本中学校に入学するも、その同窓生たちの志望がなべて、彼が「泥棒なり悪人なり」と考えていた官僚になることであると知り「不愉快」を感じた滔天は、「自由民権の思想を鼓吹してもって人材を養成」することを試みているという徳富蘇峰の大江義塾に入塾した。入塾した当初、その自由放任主義的な教育法と、塾生たちが自ら議論して塾則を定めるといった「自治」的な雰囲気^{あきらか}に満足した滔天は、大江義塾を「自由民権の新天地」「実に余が理想郷なりき、否余が理想よりも遙かに進歩せる自由民権の天国」とまで評価した。ところが、やがてここの塾生たちの「自由民権」もある種の「功名心」に駆り立てたものであることを知ると、塾を去り、東京へ向かう。だが、たどり着いた東京で、再会した同郷の仲間たちが、かつての「自由民権」を熱く語る姿はどこへやら、机に鏡を置き、髪をなでつけ、銭湯に行けば体を一時間もかけて洗い女性にうつつを抜かす様子を滔天は目の当たりにする。滔天は、夜になると、一人世界に投げ出されたかのような虚無感ともいべき感情に襲われ、「竊かに声を絞りて泣き伏したる事幾度ぞや」と最初の東京生活を語っている。

そんなある日、散策の途中にキリスト教会の前を通りがかり、宣教師による説教を聞いたことをきっかけに、「暗夜に光明を望む」かのような感覚を覚え、滔天は「一身万事をこの神に捧げて一生を送らんと感想を起」こした。そして、すぐに聖書を買^{あきらか}い求め、貪り読んだ結果、マタイの福音書の一節の「身の光は目なり もしなんじの目瞭ならば全身もまた明なるべし、もしなんじの目眊^あからば全身暗かるべし この故に爾の中の光もし暗からばその暗こと如何に大ならずや…この故に我爾等に告^{つげ}ん生命のために何を喰^くい何を飲^{のみ}また身体のために何を衣^きんと憂慮^{おもいわずらう}ことなかれ 生命は糧より優り身体は衣よりも優れたるものならずや、爾等^{あん}天空の鳥を見よ稼^あことなく穡^{さく}ことをせず倉に蓄^{たくわ}えることなし しかるに爾等のうち誰か能^よおもい煩^{わづら}いてその生命を寸陰も延べ得んや また何故に衣のことを思^{おも}わずらうや 野の百合花は如何にして長^{そだ}つかを思^{おも}え 勞^{つとめ}ず紡^紡がらざるなり…爾等まず神の国とその義とを求めよ 然らばこれらのものは皆なんじらに加えられるべし、この故に明日の事を憂慮^{おも}なかれ明日は明日の事を慮^{おも}わずらえ 一日の苦勞は一日にして足れり、…」という言葉の一つ一つが彼の心を深く感動させ、活力を取り戻させたという。

こうして滔天は洗礼を受けキリスト教徒となり、母・サキと兄・彌蔵までも入信させてしまうのであるが、ある疑問に直面する。それは「先ずパンを与^{あた}うべきか、福音を先にすべきか」という問題であった。兄・民蔵から学資の仕送りが困難になったため帰郷するようにと言われた滔天は、1887 年に彌蔵とともに故郷・荒尾に帰ってきていた。その際、凶作により困窮する荒尾村の農民たちの姿や農婦・おナカの談話を見聞きしたこと、さらに兄・民蔵から「宗教の安心によりて貧境を慰めしむるは完全なる方法にあらず、慈善的救助は道義の切売にして一時の姑息手段なり、すべからく人権の大本に遡^{さか}ってこれが恢復を策せざるべからず」¹⁰⁵と説かれたことにより、滔天のキリスト教への信頼が揺らぎ始める。翌 1888 年、熊本英学校、そして長崎のカブリ英和学校へ通い、滔天は静かに学業に励むが、学べば学ぶほど、彼の中には次々と疑問が湧き出で、理性に従えばすでにキリスト教の神性を否定する境地にまで至っていた。感情ではいまだキリスト教への思いが断ち切れず、「理想と感情の衝突」に苦悩していたところ、兄・彌蔵がキリスト教を脱会した手紙に勇気を得て、とうとう滔天はキリスト教から絶縁する。

この後の 1889 年、滔天の思想形成にとって重要な「一友人」との出会いがあった。それはイサク・アブラハムというスウェーデン人の老人との出会いであった。滔天によれば、このアブラハムという老人は一種の汎神論者で極端な自然主義者であった。「基督教的有神説に反対して、現今の文明なるものを憎悪せり、彼が畢生の希望は、現社会を破壊し尽

して無政府の世界となし、人民箇々の私有権を奪うて共有となし、通貨を撤し^{しょうこ}商賈を廃して、物々交換の旧世紀に返らしめ世界人類を挙げて共夫共妻の一家族たらしめ、万民を駆って農婦たらしめもって太古の民に帰るにあり」。アブラハムの説を聞いた滔天は、「基督教の迷走」から脱し、荒尾村の農民のように生活に喘ぐ人々が欧米にもいることを知り、そして「文明に随伴する貧富隔絶の弊毒を知覚」して、それまでの自由民権論をさらに普遍的思想にまで昇華させるきっかけを得たわけである。彼は言う。

ここにおいて余はパンを与うることの最大急務なるを断定せり、しからば市蔵兵吉をして衣食に飽かしめ、かつ教育を受けしむるの道如何、否、余が家庭に受けし思想と、基督教に得たる知識とは、共に余が世界的人間なることを知らしめたり、しかして狂乞食のアブラハムは、欧米の文明諸国において殊に状を市蔵、兵吉と同ふするものの夥多なるを知悉せしめり、ここにおいて余は世界万邦を通じて貧民の状態を一変する策なかるべからず

では、世界中の貧民たちを救うにはどのような策を講じるべきなのか。当時の滔天はまだその答えを持っていなかった。この二年後、その答えを兄・彌蔵が説く「支那革命主義」に見出し、滔天は中国革命のために奔走していくことになったわけである。

さて、孫文の革命運動の歴史において、滔天との出会いは、日本を拠点とした初期の革命運動の起点とも言うべきものであり、これが後の 1905 年の中国同盟会結成につながったことを鑑みれば、彼らの出会いがいかに重要なものであったか推察できよう。

滔天と孫文が邂逅を果たしたのは、1897 年 9 月、横浜の陳少白宅でのことであった。時に滔天 26 歳、孫文 31 歳。以下、宮崎滔天の『三十三年之夢』の記述に沿って、二人の出会いの一幕を紹介したい。

翌朝早起。馳せて再び陳白君の寓に至る。乃ち例の愛嬌ある下婢^{かひ}に面し、様子如何にと尋ねれば、マダお寝になつて居ます。イザお起し申さんと云ふにぞ、余は之を制して庭前を徘徊し、彼の起き上るを待つて、獨り妄想に耽り居たりしが、偶々バインと音して扉の開くるに、何心なく顔上げて打眇むれば、寢衣の儘にて頭を出せる紳士あり。余を見て軽く首肯きつゝ、英語もてお上りなさいと云ふ。之を熟視するに、曾て寫眞にて見覚ある孫逸仙君其人なり。

だが、応接間に案内され対座して改めて見た孫文は、「口も漱がず顔も洗わず、ホンの寝起のそのまま」であった。滔天は思わず、「その無頓着に驚けり、しかして少しくその軽躁なる」、「この人能く四百州を背負って立つべきか、また能く四億万衆の上に政權を揮うべきか、吾れ終にその人を助けて我志を遂ぐるに足るや如何」という感想を抱いている。着替えて再び孫文が姿を現すも、「その頭髮を撫でつけ、衣服を更めて」「実に好箇の紳士」ではあったが、滔天の目には「なお何となく物足らぬ心地せり、おもえらくモット貫目なくては」と映っていた。しかし、この直後、滔天は「外貌に依りて鼎の輕重を判ぜんと試みたるなり」、「余や東洋的觀相学の旧弊に陥りて自ら覺らざるものなり」と、見た目で判断していた己を責めることになる。孫文から中国革命に対する考えについて聞いた時であった。

彼（孫文—筆者注）は徐ろに口を開けり曰く「余は人民自ら己れを治むるをもって政治の極則なるを信ず、故に政治の精神に於ては共和主義を執る、然り、余や此一事を以てして直に革命の責任を有するものなり、況や清虜政府を執る茲に三百年、人民を愚にするを以て治世の第一義となし、その膏血を絞るを以て官人の能事となす、すなわち積弊推移して今日の衰弱を致し、沃野好山、座して人の取るに任するの悲境に陥る所以なり、心あるもの誰か袖手して傍観するに忍びんや、これ吾徒自ら力を揃らず、変乱に乗じて立たんと欲して、而して空しく蹉跎せし所以なり

このように話しているうちに、つい先程まで「処女の如かりし彼は、何時しか脱兎の如くなり」、その「一言は一言より重く、一語は一語より熱し来りて、終に猛虎深山に嘯く」かのようであった。孫文は続けて言う。

人或は云はんとす、共和政体は支那の野蛮国に適せずと、蓋し事情を知らざるの言のみ、抑々共和なるものは、我国治世の神髓にして先哲の偉業なり、すなわち我国民の古を思ふ所以のものは、偏に三代の治を慕うに因る、而して三代の治なるものは、実に能く共和の神髓を捉え得たるものなり、謂ふことなかれ我国民に理想の資なしと、謂ふことなかれ我国民に進取の気なしと、則ち古を慕う所以、正に是れ大なる理想を有する証的にあらずや、又是將に大に進まんとする兆候にあらずや

「我が中国は、国土が広くまた民が多くいるために、今まさにまな板の上の肉の状態である。これを飢えた虎が食べれば、その野蛮な力を振るって世界に雄視するだろう。逆に道徳心あるものがこの力を用いれば、人道を説き世界に号令するだろう。私は世界の一平民として、また人道の擁護者としてもこの状況を見過ぐす訳にはいかない。ましてや、この国に生まれ落ち、その苦痛を直接受ける身であれば、たとえ才能なく知恵が乏しく、大事を担えるような人間でなかったとしても、今は誰かにこの重任を押しつけ、ただ見ている訳にはいかないのだ。だから、自ら革命の先駆となるべく、時代の流れに応えようとするのである。天がもし我が党に味方し、豪傑の士が助けに来てくれるのなら、私は今の地位を譲り、そのために犬馬の労を取ろう。それがなければ、自らその大事に当たるだけである。中国の人民のみならず、アジア人、そして、世界の人道を擁護するため、天が必ず我が党に味方してくれると信じている。君らが僕を尋ねこうして出会ったのも、そうした天の助けなのだ。その兆しはすでにここに現れている。我が党は諸君らの期待に背かないよう努めなければならない。だから、諸君も力を出して我が宿望に協力してほしい。中国四億の民を救い、（西欧列強に蹂躪される—著者注）アジア人たちの屈辱をすすぎ、そして世界の人道を回復・擁護する道は、この中国革命の成功の可否にかかっているのだ。」

これを聞いた滔天はすっかり孫文に魅了されてしまう。整然と組み立てられた論理、その明快さ、それでいて心を震わせる言葉の熱気…弁が特に立つ訳ではないのに、「造らず飾らず」のその言葉はまるで「自然の音楽」であり、「革命の呂律」である、と滔天は評している。だが、話が終われば、また子どものような、田舎娘のような、そんな素朴な雰囲気である…ここで滔天は、「吾れ思想を二十世紀にして心未だ東洋の旧套を脱せず、徒らに外貌によりて慢に人を速断するの病あり」として、見た目で孫文という人間の器を見誤ったことを「恥じ入りてひそかに懺悔」している。そして、言うのである。

孫逸仙の如きは實に己に天真の境に近きものなり、彼何ぞ其思想の高尚なる、彼何ぞ其識見の卓抜なる、彼れ何ぞ其抱負の遠大なる、しかして彼何ぞ其情念の切実なるや、我国人士中、彼の如きもの果して幾人かある、誠にこれ東亜の珍寶なり。

このように滔天は孫文に最大の評価を与え、「余は實に此時をもって彼に許せり」との言葉の如く、自らの生涯を孫文の革命運動支援に捧げることを決意するに至った。

この後、滔天はすぐに犬養毅（1855-1932）に孫文を紹介し、孫文の滞在許可を取り付けた上、孫文と陳少白が東京市内に住めるように取り計らっている。ここから日本を拠点とした孫文の革命運動がすすめられていくことになる。孫文の革命運動において滔天が最も貢献した点は、日本の政財界や在野のアジア主義者、そして当時日本に留学していた若き中国人たちと孫文を結びつけたことだと言えるが、滔天の献身ぶりは孫文自身も評価するところで、孫文の自伝には「革命のために奔走して終始懈らざりし者」として「宮崎兄弟」の名が挙げられている。

5) 革命運動におけるシンガポールと荒尾

革命運動支援の動きのなかで、滔天が死をも覚悟して加担した計画がある。それは、中国の惠州から蜂起し、興漢会の会党勢力を頼みとしてまず広東省を占拠し、そこに革命の本拠地を築こうとする南進蜂起計画で、1900年6月に孫文や滔天ら6人は、この計画を実行するため横浜を出発した。この南清蜂起にける滔天の思いは並々のものではなく、「この行の生て還るを期せざりき¹⁰⁶」というほどであった。移動の船中で何度も会議が行われた結果、①中国の李鴻章から提案されている内容については、滔天らが向かい交渉する、②孫文はサイゴンからシンガポールへ回航して滔天らを待ち、シンガポールの華僑たちに軍資金と同士を募ることとなった。

さらに滔天の提案で、③当時シンガポールに滞在していた中国の改革派である康有為に対し、革命派との提携について持ちかけることも計画された。実は、康有為と孫文の提携についてはすでに一度画策され、そして失敗に終わっていた。これより2年前の1898年、滔天は犬養の支援を得て、清国事情の調査のため上海に渡った。当時の清国は、皇帝・光緒帝の恩恵を受けた康有為が諸改革に取り組み、その勢いは飛ぶ鳥をも落とすほどのものであった。滔天は康有為を重要人物とみなし、その同志たちの中にも優れた者が多くいると見て、孫文らと提携させれば天地を揺るがすことができるのではないかと考えた。だが、康有為が目指したのは、皇帝を頂点にいただき、そのもとで近代化に着手するという立憲君主制下の改革であり、孫文ら革命派とは目指す方向が違うことを滔天は理解しきれていなかった。

同年9月、滔天がまさに中国にいたこの時、西太后を中心とする保守派のクーデタ・戊戌の政変が起こる。この結果、光緒帝は幽閉され、後ろ盾を失った康有為は失脚、その身を迫られることとなった。滔天は康有為の亡命を助け、10月、康を連れて東京に戻り、改革派と革命派の提携をはかるべく、孫文を康のもとに連れて行こうとした。ところが、康にとって孫文ら革命派は「逆賊」以外の何者でもなく、康は孫文との面会を拒否した。11月には第一次大隈内閣が倒れたことから康に対する日本の態度も冷ややかになり、間もなく康がカナダへと発ったことから、滔天の計画は一度頓挫していたのである。

だが、滔天のこの提案に一同も賛成し、一番因縁の深い滔天がこの任にあたることが決定された。かくして、1900年6月29日、滔天はシンガポールに上陸し、日本人街にあっ

た松尾旅館に向かう。この松尾旅館は、かの日本の文豪・夏目漱石も訪れた旅館で、日本人がシンガポールに渡り始めた最初期からあった旅館である。

到着後すぐに、滔天は康有為との提携を図るべく天南新報社を訪ねた。しかし、その二日後に返ってきた康からの返事は、「恩人滔天の来訪に接し面会の手続きをとったものの、政庁の警戒がきびしく、許可されるか分らない」というものであった。実はこのとき、「滔天らがシンガポールにやって来た目的は、康有為を暗殺するためである」という噂がたっており、康有為の態度はこれを警戒してのものであった。この返事に滔天は激怒した。そのような噂を真に受け、かつて亡命を助けた自らの面会を断る康有為の不義理を厳しく非難する手紙を送りつけている。この滔天の手紙に驚いた康有為の仲間がイギリス政庁に連絡したことにより、7月6日午後、松尾旅館にイギリス政庁・警視總監率いる一隊が現れ、滔天と清藤は逮捕・拘引されてしまった。そしてその結果、滔天と清藤は保安妨害によりイギリス海峡植民地から五年間追放という宣告を受けた。牢獄からそのままクリフォード埠頭に護送、その日のうちにシンガポールを離れる日本郵船会社の佐渡丸に乗船することを条件に滔天たちは釈放されるのだが、こうして滔天たちのシンガポールでの活動はあっという間に頓挫した。

シンガポールを離れた滔天たちは香港に上陸し、そこで革命の計画を進めようとしたが、すでに香港のイギリス政府にも連絡が回っており、滔天らはここでも五年間の追放を宣告されてしまう。その後、孫文らは惠州蜂起の計画の大幅な変更を迫られながらも、蜂起を実行に移したが、台湾総督・児玉源太郎からの武器援助の約束も政権交代により果たされず、また日本からの武器輸送も困難となり、惠州蜂起は失敗に終わった。

蜂起失敗後、滔天は同志から革命のためのお金を着服しているのではないかとの疑いをかけられてしまう。これは根も葉もない噂であったが、ともに革命を志す仲間だと思っていた人々から疑いをかけられたことは、滔天にとってショックなことであった。そして、滔天は革命運動の前線から退くこととなる。

だがこのあと、滔天が自らの半生記として描いた『三十三年之夢』が、思いがけず孫文の革命運動を一挙に押しすすめる推進力となった。前述したように、孫文との出会いや孫文の思想について詳細に記されたこの『三十三年之夢』が、翌年には中国語に翻訳されたことにより、当時日本にやって来ていた留学生をはじめとする中国の革命を志す若者に孫文の存在を知らしめることとなったのである。これがやがて1905年の中国同盟会の結成につながっていった。

孫文の革命運動における宮崎滔天の功績は孫文自身が語るように非常に大きなものであり、その転換のきっかけとなったのは、滔天にとっては不本意かもしれないが、シンガポールでの一連の事件だったのである。

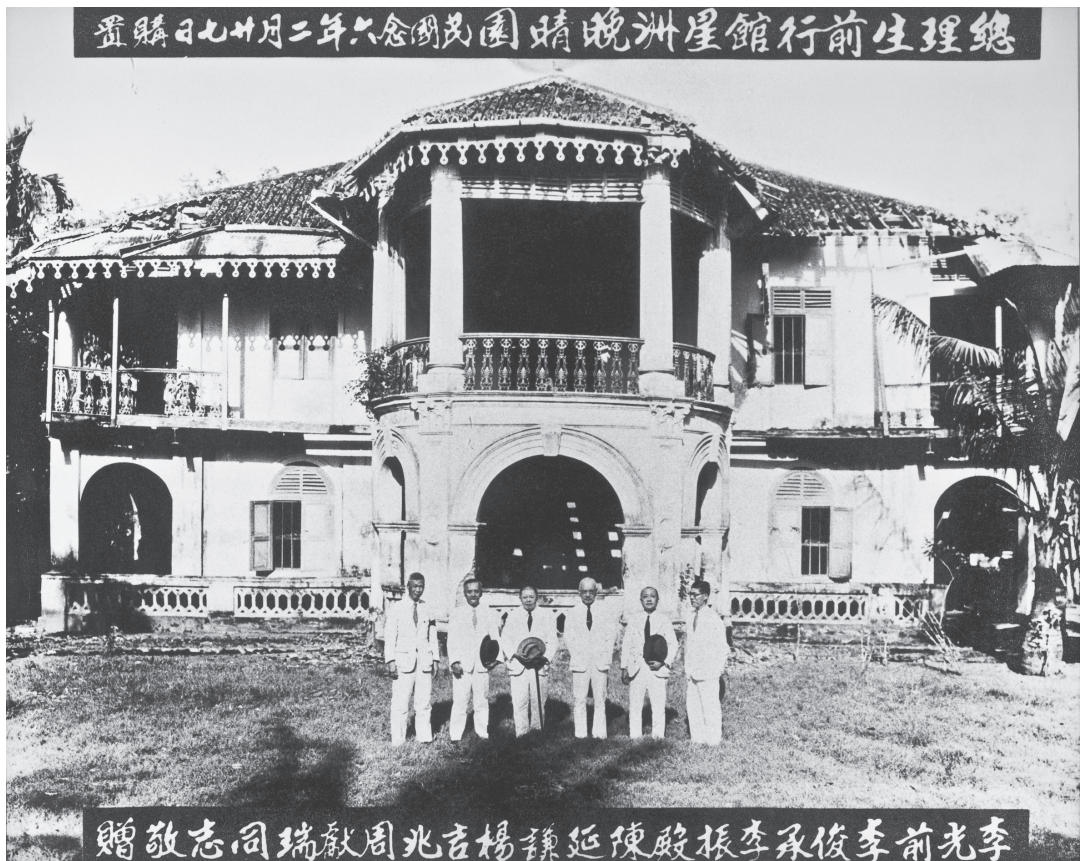


宮崎滔天著『三十三年の夢』【所蔵：荒尾市】

III. 施設紹介：シンガポール孫中山南洋紀念館 晚晴園

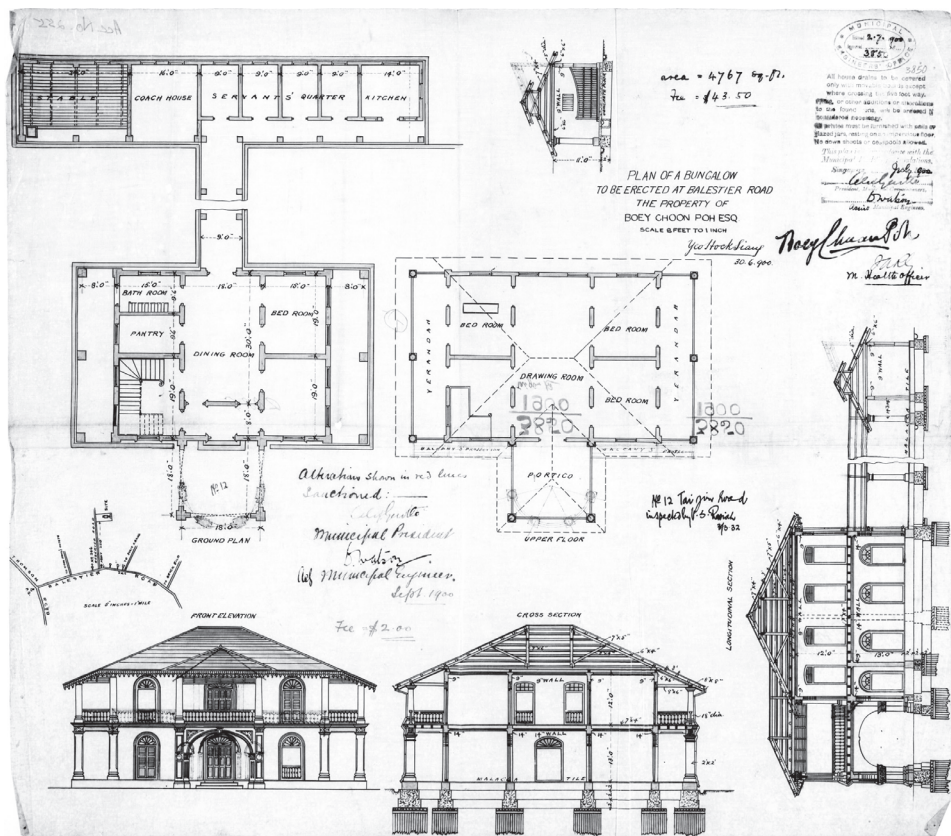
晚晴園はシンガポールバレスティア・ロード地区のタイ・ジン・ロード 12 号に位置する古い二階建ての建築物である。1902 年に落成¹⁰⁷して以来、数回修築され、今日まで 115 年の歴史を有する。

晚晴園の建物は凸字形を呈し、南向きで東に建っている¹⁰⁸。この独特の建築構造は、建築学上「アンティーク・コロニアル別荘」といわれるもので、この建築には当時ヨーロッパで流行したパラディアンスタイル¹⁰⁹が採用され、さらに中国様式とマレーシア様式を加えた中西折衷の建築設計様式となっている。この種の建築物の主な特徴は、対象美を追求し、廊下が広く、鎧戸式の窓、通風設備が整い、陽光と雨水の浸食を防ぐことができ、熱帯の気候に適している。かつてシンガポールの富豪の邸宅は、みなこうした建築様式を踏襲していた¹¹⁰。



1937 年当時の晚晴園【提供：孫中山南洋紀念館・晚晴園】

シンガポール国家土地局の記録によれば、晚晴園の建設計画は、広東商人・梅泉宝(1873? -1926)が1900年に市政庁へ申請し許可され、1902年に建物が落成し、「明珍廬」と名付けられた。梅泉宝は、ただ一人の陳という医師の送別会をここで開いただけで、まもなく「明珍廬」を売却した¹¹¹。次いで張永福、張華丹の兄弟が母の住居として、この建物を購入し、「晚晴園」と改名した¹¹²。晚晴園はその後、孫文がシンガポールを訪ねたとき、東南アジアでの革命基地と住居として使われた。孫文は革命運動のため九回もシンガポールを訪ね、そのうち四回は晚晴園に泊っている¹¹³。



晚晴園設計図面（1900年）【提供：シンガポール国家档案馆】

1910年8月4日、辛亥革命成功の前年、張永福は晚晴園を処分し、一時期晚晴園は寂れてた¹¹⁴。1937年2月27日、李光前、陳延謙らが合同出資し晚晴園を買い取り¹¹⁵、修築後一般開放して往年を偲んだ。まもなく太平洋戦争が勃発し、シンガポールが陥落、日本の統治下において、晚晴園は日本軍の通信拠点として使用された。1946年に戦争が終わると再度修築され、中国国民党駐シンガポール支部の事務所として1951年まで使われていたが、その後は再び荒れ放題となった。15年後の1966年、孫文の生誕百周年記念に合わせて、中華総商会董事の諸氏の提案のもと、四度目の修築工事が完了した¹¹⁶。

晚晴園の往年の外観を復元しようとするなら、その答えは文献資料から見つけ出すしかない。シンガポール国家档案馆に所蔵される晚晴園の建築図によれば、晚晴園の一階大広間の両側には、もとは三間の寝室があり、階段が広間の左側に作られていた。二階には客間があり、その両側にはやはり三間の部屋があった。1929年12月に内装が完成した後、

階段は大広間の右側に移された¹¹⁷。孫文の寝室は、この階段を上った左側の後ろの部屋で、この部屋で執務していたと思われる¹¹⁸。建築図から見て、この寝室の面積はおよそ 30 平方メートル（6メートル×5メートル）ほどである。当時孫文が使っていた鉄製のベッド、机や椅子、文房具、また記念品や写真などは、日抛時期にすでに紛失し残っていない。上下二階の六間の部屋は、1965 年の修築時に取り壊された。

1994 年、シンガポール国家古跡保存局は晚晴園を保存すべき古跡に認定した。1996 年には、「晚晴園——孫中山南洋記念館」と正式に命名された。1997 年、晚晴園の修復及び増築計画のなかで、晚晴園の主要建築後方にあった平屋の建物（使用人の宿舎、厨房及び厩）が取り壊され、二階建ての展覧室と視聴覚室に改築され、修築工事は 1999 年に完了した¹¹⁹。2009 年、晚晴園はシンガポール国家文物局の管理下に入り、その後一年間閉館したが、560 万元をかけて再修築、整備された。

2011 年 10 月 8 日、リニューアルオープンを果たした晚晴園は辛亥革命百周年記念に合わせて再開し¹²⁰、現在の総面積は 3119.62 平方メートルで、建築物面積は 1441 平方メートル（展示エリア 592 平方メートル）である¹²¹。



現在の晚晴園【提供：孫中山南洋記念館・晚晴園】

修築後の晚晴園には、元の建築様式がほぼ残されている。現在、館内には多数の辛亥革命に関する物品、写真、音声影像資料などが五つの展示ホールで展示され、晚成園の位置づけをシンガポールと辛亥革命の関係に焦点を当てた史跡としている。

2011 年に辛亥革命百周年の記念活動に合わせて晚晴園が再度開館したことは、非常に重要な出来事であった。晚晴園は数多くの貴重な史料を展示し、特別展示の定期的な展示替えも行われている。教育促進のための活動を行うことを通して、若年層を含むあらゆる年代の来館者たちの中で中華文化の認知度を上げ、シンガポールが辛亥革命の中でどういった役割を果たしたかを伝えている。

Ⅳ. 施設紹介：宮崎兄弟資料館（熊本県荒尾市）

宮崎兄弟資料館は、日本の熊本県荒尾市にある。「宮崎兄弟」とは、八郎（1851-1877）、民蔵（1865-1928）、彌蔵（1867-1896）、寅蔵（滔天、1871-1922）の四人のことで、彼らは近代東アジアという激動の時代のなかで自由民権思想を掲げ活動した人物である。特に、末弟の滔天が有名であり、孫文の革命運動を支援した日本人として知られ、二人の友情の歴史は今なお語り継がれている。



荒尾市の位置図

荒尾市はこの「宮崎兄弟」の生誕地であり、彼らが生まれ育った「宮崎兄弟の生家」が現存している。「宮崎兄弟の生家」は、江戸時代後期に建てられた木造の茅葺屋根一部瓦葺の平屋建ての建物で、孫文も二度訪れている（一度目：1897年11月、二度目：1913年3月）。「宮崎兄弟」の死後、一時他人手に渡り増改築がなされたが、「宮崎兄弟」という偉人が生まれ育ち、孫文が二度訪れたというその歴史的価値から、1973年に熊本県指定史跡に指定された。さらに1992年には、荒尾市は市制50周年の記念事業として「宮崎兄弟の生家」を購入し、復原工事を行い、同敷地内に「宮崎兄弟資料館」を建設した。そして翌1993年6月、郷土の先覚者「宮崎兄弟」の功績を顕彰し、荒尾市と中国をはじめとするアジア諸国との交流のシンボル施設として、「宮崎兄弟の生家施設」が開館した。



現在の宮崎兄弟の生家【荒尾市撮影】

「宮崎兄弟の生家施設」の庭には、滔天と孫文の友情を伝えるシンボルツリーがある。それは、1913年に孫文が荒尾を二度目に訪れた際、記念写真として撮られた写真に写っていた梅の古木である。樹齢は250～300年といわれており、宮崎家と縁があるという太宰府天満宮（福岡県太宰府市）からいただいた梅の木だと伝えられている。滔天と孫文の交流の歴史を実際に見た生き証人として「友情の梅の木」と呼ばれ親しまれており、この梅の木の枝を挿し木したものが、東京の中国大使館や福岡の中国駐福岡総領事館に植えられている。

このほかにも、滔天がシャム（現在のタイ）に渡った際に持ち帰ったと伝わる菩提樹の木や中国から持ち帰ったと伝わる牡丹もあり、「宮崎兄弟の生家施設」の庭を彩っている。また、2016年には中国駐福岡総領事であった李天然氏から「友情の梅の木」植樹のお礼として、荒尾市に牡丹が寄贈され、「宮崎兄弟の生家施設」の庭に春の訪れを告げている。このように、荒尾市では「宮崎兄弟」と孫文の友情の歴史をもとにした交流を今なお行っており、資料館はそのシンボル施設としての役割を果たしている。



1913年 孫文来荒時に撮られた記念写真に写る「友情の梅の木」【荒尾市撮影】



宮崎兄弟の生家施設の庭にある菩提樹【荒尾市撮影】



中国駐福岡総領事から寄贈された牡丹【荒尾市撮影】



宮崎兄弟の生家施設の庭の牡丹園【荒尾市撮影】